

総合的な学習に期待したい

センター研究員（東京大学教育学部附属中・高等学校教諭） 高橋 均

総合的な学習が新指導要領の大きな目玉として、小・中・高に置かれることになった。その移行期を向かえた現場サイドは、教育課程にどう位置づけ、どんな内容を、どのように指導したらよいか、困惑しているのが現状である。

新指導要領の例示に従って、「国際理解は英語で、環境は理科と社会で、福祉は家庭科と社会、保健で、情報はコンピュータを使って技術と数学で、ITをうまく活用して、教科時間の減った分を補えばいいんだ……」というような声をよく耳にする。私たち教師はどうしても従来のカリキュラムの中で教科の枠をイメージしてしまう。総合的な学習がただ単にいくつかの教科の合併であったり、選択学習であったり、高校の総合化であったりという印象が強い。私が考える「総合」は、合科をしたり、クロスカリキュラムをつくったりすることではなく、個々の生徒の体験・学習が自分の中で総合化され、内面化されて一つの人格を形成していく、「内的総合化」をさしている。

生徒たちは、これまでに実にたくさんのことを体験し、学習してきている。学校以外でも様々のことを学んでいるに違いない。しかし、それが一つの調和のとれた人格にまとめられていないケースが増えている。ややもすると学校で学ぶ目的を見失いがちになり、社会や自分を取り巻く環境に対する疑問も感じなくなっている。一方、中学、高校の段階は理性的な面の成長がもっとも著

しい時期であるから、理性の助けにより、価値観を磨き、より豊かな人格を形成していくことも可能になる。生徒自身がこのことをはっきり自覚し、意識して自分の成長を見つめ、成長への努力に取り組むようになる契機を与える役割を総合的な学習に期待したい。

私が子供の頃、30～40年前まで、遊びを含めて地域や家庭、学校の生活を通して、ごく自然に「内的総合化」が行われ、中学生あるいは、高校生としての自我が確立していたと思う。そうした体験をする機会がなくなった現在、この「内的総合化」がうまく進められなくなっている。社会生活、家庭生活の見直しが根本だろうが、学校教育では直面する現実の生徒への対処として、「内的総合化」を促す指導が必要である。

学校臨床総合教育研究センターの研究員として、「いじめ問題」プロジェクトに参加させていただき、研究会、シンポジウムでの議論、学校現場での実践報告、海外の現状など、いろいろな立場の人と意見交流ができ、私にとってはとても新鮮で、刺激的な2年間であった。同時に、「総合的な学習」が当初考えていた以上に重要であることを改めて痛感するとともにさまざまな可能性への手応えを感じている。

このような貴重な体験を私に与えてくださったセンターのスタッフの皆様、また、附属学校の教職員の皆様に深く感謝させていただきたい。